あさ 5

2016

樺美智子さんへ贈る詩

若月　彰

（前略）貴方は手に編棒一つ持っていず／貴方は打たれ／貴方は押され／貴方は倒れた／貴方の前の警官は／貴方を踏みつけ／警官の靴は泥濘を貴方の身にはねかけ／貴方の白い脚や／しなやかな背を／豊かな胸を／柔らかい頬を／漆黒の髪を／清楚な白い衣服の女学生を／後から後から警官は／貴方を蹂躙した（中略）なにを希い／警察病院に運ばれていったろう／美智子さん貴方が目を閉じる前／信じた大望は／日本の独立自主の日の来ることを／生命の終りまで／息絶える十時まで／生涯かけて信じたろう／日本の父母の島に／悪政がなく民衆と仲良い警官が立ち／基地もなくアメリカ軍事援助も不要の／平和な日の来るのを／きっと信じて瞼を閉じたに違いない（後略）

（水音・昭和35年6月号より）

版画　武井石艸

あと

五　月

義母逝く　二句

雨の日の白蝶のゐる草の葉に

春待ちて柞の杜は揺(あよ)くなり

蟻出たか二本のやうな靴の紐

青空のどこ撰んでもさくらんぼ

春はあけぼののまへリヒテルの平均率

柞

佐藤喜孝

三月や

大日向幸江

パンの耳雀に与え鳥雲に

福ダルマ目を描き入れて解氷期

下萌を蹴ちらし來たりブルドッグ

春の川渡りて近し母の家

三月や象の福耳犬の鼻

屋烏二羽餌の片追ふて冬日向

うすずくや鳴きごゑこぼし寒鴉

冬の日の鴟尾に一羽の鴉浴ぶ

鴨の群れ水面をすべる寒の声

行き先のないまま雪の降る五叉路

☆

佐藤恭子

春千差

七郎衛門吉保

冴返るショパンの響き万華鏡

古雛変なにほひと男の子

蝌蚪狩りに走る腕白網背負ひ

終りなき仮設住ひに春埃

改憲の首領跋扈する春死なん

白き馬

篠田純子

睫まで白き馬なり風光る
春燈レミオロメンのファルセット
ミキサー車の緩き回転春愁
スギ花粉拡散保育園落ちた
何処よりか花のひとひら駅ホーム

かごに満つ

定梶じょう

撫づれば目閉づるこの子猫を貰はう
だれもゐぬ朝の干潟へ忍び入る
マッチ借る舷を寄せあひめかり舟
北窓や開けば時計ゆっくり打つ
径消えがちに惣の芽のかごに満つ

新函館北斗

須賀敏子

単線や河津桜と菜の花と
函館へ春届けてよ新幹線
ガン告げる友の電話よ春北斗
大振りの伊予柑届く兄病むも
山桜桃咲いてぽちぽち旅心

小鳥の巣

竹内弘子

半醒のまくら許まで木の芽雨
デパートに半旗めくもの雨水の日
吉日を半ば信じる小鳥の巣
春はやて半値のビラのとびゆける
キリストの半裸まぶしき春まつり

大股に歩き春愁ふりはらふ

受験の子気遣ふ親を気遣へり

子思へばミモザの花の揺れやまぬ

吊革の揺れて春めく車内かな

揺り椅子に舅眠りをり春霙

揺

田中藤穂

其の日の匂い

中川句寿夫

寒雀いつも遅刻の背高き子

身ぐるみの体重測定桃の花

何探すともなく探し暖かし

山笑う芳名帖の外三名

畦焼いてその日の匂い妻にあり

春活けるうすむらさきの雅かな

墓参り終へうららかや回り道

一帯はうすももいろにうららけし

三・一いち復興祈る支援の輪

三月や幾つも雨風暴れたり

三月

桂子

崎長

鴇色

和理

森

かぶりつくコロッケパンに春キャベツ

掌に山盛りにして雛霰

浮島に松の木二本朧月

明年もお逢ひしませう雛納

鴇色のブラウス求め春に舞ふ

囀やついつい目の行く親子連れ

緑児のご満悦らし雛の宵

湯の宿や春愁一つ片付きぬ

母と来し宿に変らぬ野春菊

椿の芽や太き茎まろやかに苦し

椿の芽

赤座典子

きらきらしてる日

泉川秋

春来り猫に品位を諭す人

太陽の射したる所蝌蚪の国

ガラケイの待ち受け画面風光る

フランスの人に届かぬ春の風

早咲きの桜と出逢ふ里の寺

踊子のマリーの肌へ花降れり

リラ咲けりあずなぶーるに出会へる日

晩春の隠国泊瀬貝渡る

惜春や月も中也の月となり

満引の綱截ちにけり御柱

☆

動石上井

四月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

路地あれば路地に川霧置き行灯　佐藤喜孝

京都の鴨川辺りは、道から川に向かって鰻の寝床状態に家が建っています。秋の冷えた早朝、宿の近所を散策します。川霧が路地まで漂い始め、灯の消えた置き行灯がぽつんとひとつ。格子戸の開いて、また閉まる音。

旅心をそそられる一句でした。（純子）

雲湧いて瑞牆山や芽落葉松　井上石動

作者のカメラマン的視線を感じました。瑞牆山に雲が湧くのをズームアップした後、カメラは早春の落葉松林に。見ていると、くすぐったくなるような落葉松の芽に集中します。瑞牆山のダイナミックな景と、繊細な小さな芽との対比も素晴らしいと、鑑賞いたしました。（純子）

雲湧いて瑞牆山や芽落葉松　井上石動

瑞牆山と聞くだけで登ったことも見たこともないのに懐かしさを覚える。瀧春一句集『瑞牆』のあとがきに「句集の名は画の多い字だが「瑞牆」にした。今年の梅雨どきに出かけた甲州増富に近い山の名をつけたのである。この山の美しさはいつまでも目に残っている。」とある。先生七十六歳の時の上梓である。こつこつと瀧春一の句集電子化に勤しんでゐる。いま『燭』に取り組んでゐるところ。千句を超える収録句で遅々と進まない。『瑞牆』はいまのわたしの年代の句、この句集にたどり着く日が楽しみだ。

瑞牆山に雲立ちわたり澤あやめ　瀧　春一

瑞牆山岩峯みせて梅雨日ざし
栗飯を瑞牆荘に呼ばれけり　　伊万里梅城
紅葉の瑞牆荘に招かれり

掲句の瑞牆山賛は落葉松の芽を前景にし、みづみづしい一句である。（喜孝）

アネモネや窓に摑まり立ちの猫　　大日向幸恵

アネモネの咲く庭に、小鳥か蝶を見つけた猫は二足立ちして、飛ぶものを追い、首を懸命に回しています。「ウニャニャニャン」と時折小声を出したりもしています。明るい日差と、猫を見ている人の笑い声を感じました。（純子）

「お騒がせしました」とまた豆を撒く　　斉藤裕子

通常の「鬼は外、福は内」の追儺の後、ご自分の挨拶として「お騒がせしました」と豆を撒いたとのこと。作者の生真面目な性格と同時に、作者のユーモアを感じた一句でした。（純子）

細氷や心を溶かす文届く　　斉藤裕子

細氷はダイアモンド・ダストともいふ。病床にあることが多い裕子さん。何度も何度もいただいた手紙を読まれることであらう。キラキラと空中を彩る細氷がり便りのあひだから立ちのぼるのである。（喜孝）

背より手を振る指初詣　　佐藤恭子

背をそびら、指をおよびと、あえて古い時代の読みで、表現しています。おんぶされた赤ちゃんが、かわいい指を動かしながら手を振っています。何時の時代も赤ちゃんの仕草は可愛く、そしてそれを見守る母性愛も普遍です。女性のアニミズムの普遍性を感じる一句でした。（純子）

暮れ泥む薄氷に捕まってゐる藻　佐藤恭子

朝、又は昼の薄氷の句は目にするが、暮れ方の薄氷は少ない。

薄氷のうすくれなゐの朝ありぬ　鷹羽狩行

身ほとりに薄氷のあり昼餉どき　山尾玉藻

掲句は冷え込んできた暮れ方の水面をみてゐる。水草が薄氷に取り込まれてゐるのを目にした。そこを「捕まってゐる」と稚気ある表現をした。夕刻の時を捕まえた句。（喜孝）

草津の湯赤襟巻に硫黄花　七郎衛門 吉保

草津温泉の湯畑は強い硫黄の匂いがします。不意に風が吹いて来て作者の赤いマフラーに白い湯の華が付きます。赤と白との視覚での対比と、非日常的な硫黄の匂いが感じられ、印象に残りました。（純子）

腿にひっつくスカート蝌蚪の池　篠田純子

スカートのはきごこちを肉体の一部を使ひ感覚的に表現し得た。「蝌蚪の池」とあるのみで蹋んで覗きこもうとする姿勢が読みとれる。感覚を共有できない男性にも納得させられた。希有なスカートの佳句である（喜孝）。

何となくとは木々芽ぐむ頃のこと　定梶じょう

寒さもひと段落して、硬ばった身体も、気分もほぐれ始める芽吹き時です。北国にお住いの作者にとって木々の芽ぐむ頃、何となくと感じ取られることはどんな事かと、想像しています。（純子）

踏切に塞かるるひとり雪女　定梶じょう

踏切が開くのを待ってゐるのは複数か単数が

どちらかなあと立ち止まった。ひとりなら一人と云はなくとも済むかもしれない。しかし一人でもこの表現で……。で、〝ひとり〟でひとりを強調したと決めた。踏切の回りは灯りの少ない田畑か野面がよい。踏切がスポットライトを浴びたように辺りから浮き立ってゐる。雪女は雪の妖怪であるが、俳人のなかでは様々な様相を見せる。掲句の雪の降る中に立つ夜目遠目の雪女だ。〝ひとり〟がないと雪女の孤独感が出てこない。（喜孝）

日脚伸ぶジムの窓よりさう思ふ　須賀敏子

ジムでトレーニングをされている作者。つい時間を忘れて夢中になってしまいます。「まだ、こんな時間？」と、暗くなるのが早いと嘆いていたのに、この頃は「まだ明るいから」ともうひと頑張りしようとしている作者が見えてきました。（純子）

枝川のしぶくと見しは小鯵刺　竹内弘子

河口付近の枝状の川を想像しました。突然しぶきが上がり、作者は驚きます。小鯵刺が小魚を捕獲したところなのです。瞬時に語彙をまとめ一句にされるという才は、稀有としか言い様がありません。（純子）

発酵を待つ句三つ四つ春立てり　田中藤穂

まだ寒い頃に、思い付かれた句が、幾つか句帳に記されているようです。推敲して春の句として出来上がるまで、発酵するのを待つのでしょうか。前向きで意欲的な作者の姿勢に、俳人たちは次第に挑発されていきます。（純子）

お水取りすぎたるあとの追而書　中川句寿夫

奈良時代の東大寺二月堂の僧侶の公文書を想像しました。「若狭よりお水送りをして戴き、恙なくお水取も終える事ができました」などの内容でしょうか。若狭の僧侶の膝に、はらりと追而書が落ちます。「季節も良くなりましたので、大仏様を拝みにいらっしゃいませんか」想像上の追而書に、心浮き立つ一句でした。（純子）

えんぶりや父は入り婿馬の役　　中川句寿夫

瀧春一や高島茂の句集を読むと、芭蕉一茶に倣って旅に次ぐ旅といふ印象である。わたしには考へられぬ生活パターンである。以て〝えんぶり〟も体験したことがないが、おもしろさを十二分に味はへる句だ。回想句であらう。父は入り婿なので馬の役をやらされてゐる、と少年は思ったのだらうか。父への親愛の情が溢れてゐる。〈水洟や門下と言ふもをこがましい〉の挨拶句。〈猫の子のぞろぞろ國勢調査かな〉の國勢調査の文言のをかしさ。〈言葉尻ひろはれて居る春の風邪〉の春の風邪の鬱陶しさ。〈お水取りすぎたるあとの追而書〉の書き流しやう、どの句も興味深く読んだ。（喜孝）

心地よきこの二三日梅ひらく　　長崎桂子

作者の句作りの自然体に感銘いたしました。二、三日前からこの句は始まっているのです。そして今日梅が開いたのです。読み手に長閑さが伝わります。瞬時の景の切取りの句作りに専念中の私にとって、是非挑戦してみたい作風と思いました。（純子）

冬山のおむすび絶品富士絶品　　森理和

作者が冬の山で富士山を眺めながら、塩むすびを頬張っている景が見えてきました。白い三

角形がふたつ、美味しい絶品と綺麗の絶品。ストレートに作者の感動が伝わってきます。（純子）

幼子と図鑑ひらけり百千鳥　　山荘慶子

男の子でしたら昆虫か鉄道、恐竜図鑑でしょうか。「この虫知ってる。幼稚園のお庭にいたよ。」「これは幼虫でさなぎになってから蝶になるんだよ。」図鑑を見ながら夢中になって話す幼子と、首肯いて微笑む作者。季語の百千鳥が良い取り合わせと思いました。（純子）

牛車が不思議乗物好きの雛の客　　赤座典子

四、五歳と思われるこの雛の客は、理数系かも知れません。メカニズムに疑問を持っているからです。牛車の入口はどこなのか、自動車とは異質なのにいかにして走るのか。もしかして、物のサイズの等分が疑問なのでしょうか。牛車と鏡台が同じサイズだし…。間違いなく聡明な雛の客なのです。（純子）

今し方光ありしを春の雨　　秋川泉

作者の呟きそのままの句と思いました。「えっ！雨なの。さっきまで良く晴れていたのに」この後の、傘の有り無しやらのざわつき。「どうする、様子みましょうか？」などの会話も想像されます。（純子）

子育て

子育ては昼間も続く母喰鳥　森　理和
甚五郎の子育ての虎風薫る　芝　尚子
子育ての終りし吾が家松落葉　早崎　泰江
陽炎や子育てする子と待合はす　東　亜　未
子育に疲れた燕電線に　大日向幸江
新築の子育て家族春隣　須賀　敏子

小袖

しぐるるや小袖艶めく蝋燭能　芝　尚子
危な絵めく時雨に小袖みだるるは　竹内　弘子

答

冬木の芽問ひに答を得しやうな　赤座　典子
恋猫に夫はいはいと答へをり　斉藤　裕子

応ふ

鴉声真似れば応ふ彼岸墓地　松本　米子
私が桜呼べば応へて散ってくれる　堀内　一郎
声だしてテレビに応ふ秋の夜　竹内　弘子
草笛に草笛応へくるは誰そ　渡邉　友七
万緑に鎌倉大仏応へをり　大日向幸江
父呼べば母が応へる刈田かな　斉藤　裕子
けさ秋の蹠に応ふ石だたみ　定梶じょう

古地図

父の日や古地図にたどる父の村　田中　藤穂
昭和の家に古地図のありて春ふかし　赤座　典子
三光坂古地図にもあり芽山椒　東　亜　未
春の昼古地図でさがす竜泉寺　吉成美代子

壺中

障子なす壺中の天で遊びをり　王　岩
落花いま壺中の天にあるごとし　定梶じょう

忽然

忽然と車窓に広がるモネの蓮　早崎　泰江
忽然と猿をりテラスに柿喰らふ　東　亜　未
林中秋卒然とまた忽然と　佐藤　喜孝

骨壺

骨壺へ細き骨入れ石蕗の花　田中　藤穂

小粒

実桜の小粒といへど紅の十　東　亜　未
小粒なる青いちじくは葉の色に　赤座　典子
銀杏に大粒小粒鎮守かな　森　理和

こつん

鳩の餌コツンコツンと寒鴉　森　理和
初蝶のこつんこつんと杉林　吉弘　恭子

前月抄

路地あれば路地に川霧置き行灯　佐藤喜孝

雲湧いて瑞牆山や芽落葉松　井上石動

アネモネや窓に摑まり立ちの猫　大日向幸江

細氷や心を溶かす文届く　斉藤裕子

暮れ泥む薄氷に捕まってゐる藻　佐藤恭子

春霰蓑に宿らず濡れ地蔵　七郎衛門吉保

膕にひっつくスカート蝌蚪の池　篠田純子

踏切に塞かるるひとり雪女　定梶じょう

日脚伸ぶジムの窓よりさう思ふ　須賀敏子

漱石忌かはたれどきの寒きこと　竹内弘子

折紙の百枚百色春立てり　田中藤穂

えんぶりや父は入り婿馬の役　中川句寿夫

窓に日の差し早春の息吹かな　長崎桂子

冬山のおむすび絶品富士絶品　森　理和

故郷に繋がる空や冬苺　山荘慶子

薄氷や爪やはらかく病上り　赤座典子

今し方光ありしを春の雨　秋川　泉

喜孝　抄

比来披見

ホトトギス　四月号

鳥の巣に木々賑はつてをりにけり　稲畑廣太郎
何もかも春告ぐ木々よ草々よ　稲畑　汀子

沖　四月号

桃活けて壺中の闇を濃くしたり　能村　研三

雨月　四月号

朝刊を取り込むのみに悴める　大橋　晄

槐　四月号

冬霧を漉して絹漉し豆腐かな　高橋　将夫

馬酔木　四月号

大川においてきぼりの春の月　徳田千鶴子

風土　四月号

燕来て書き込み多き農暦　神蔵　器

京鹿子　四月号

しばらくは誤解のままではだれ雪　鈴鹿　呂仁

六花　四月号

島影と思へてきたる春の闇　山田　六甲

鴫　四月号

桑解くといふ遥かなる夕景色　井上　信子
いちやうにバス来る方へ寒の顔　高橋　道子

万象　四月号

寒天に干さるる蕎麦の音を聴く　大坪　景章

春燈　四月号

古利根や日差を密に冬すみれ　安立　公彦

峰　四月号

遠過ぎず近過ぎず鶯の声　布川　直幸

末黒野　四月号

海原へ翼を拡げ初日出づ　小川　玉泉
方丈の大屋根に二羽初雀　松本三千夫

雲の峰　四月号

鷹化せし鳩のごとくに直(ひた)籠り　朝妻　力

萱　四月号

床上げの日暮れまぢかく笹鳴けり　木村　嘉男
雪礫昔の腕を試しみる　亀田虎童子

比来披見

日当りて音のしてをり枯葎　小島　良子

朝　四月号

独り言句にして投じ万愚節　岡本　眸

こだま　二月号・三月号

妻入院

痛々しＩＣＵに春はなし　松林　尚志

桜前線北上活断層軋み

らん73号

傷舐めて人間帰る初景色　藤田　守啓

歯車　三月号

牡丹が崩れて女体見えざるや　藤田　守啓

燭

風の空藍張りつめて梅白し　瀧　春一

毛虫焼き殺す病妻の必死な眼

全速の足波立ててかたつむり

内職の荷をのせ梅雨の乳母車

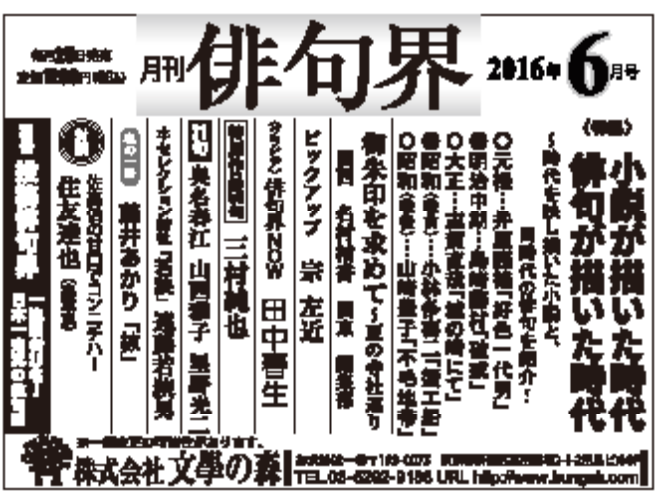
陸稲赭く灼けても踊櫓立つ

墓だけは涼しい木蔭田草取

禪僧の全身で掃けり鴨の聲

佐藤喜孝　抄

（順不同）



俳境流連

花鏡仄とゆれゐし井の頭

恭　子

新潟から東京の三鷹市に移り住んだ。母の親代わりのおばあさまの紹介で家を建てました。

それが井の頭公園のすぐ近くでした。慣れない環境にもかかわらず中学生にとっては、新しいところは物珍しく生き生きとしておりました。新潟市の繁華街に住んでいたのですが、いかんせん言葉の訛りは有るものですね。それもあまり気にしなかったようです。

春ともなると、ボート場は親子連れや、若い人達の賑やかな声声が楽しそうに広がっていました。

さくらの季節には夜会社からの帰宅は吉祥寺から井の頭公園の真ん中を帰るのですが、それはそれは賑やかなものでした。時には一升瓶を投げられたこともありました。その点公園の真ん中に交番があるので、安心していられます。

実家も転居してしまったので、なかなか公園に行く機会が減りました。久しぶりで神田川のもとを訪ねたときのこと、昔桜の花びらで池の水が染まっていた時のことを思い出した。なかなか中野から近いのに行けないでいる。

今年あたりは、散る桜でも見に行きたいものと思っている。

児が駈ける中空に春兆しけり

桂　子

季節が立春の前後の晴天の午前中からの太陽は、煌くと言う言葉が、当て嵌るように私は感じます。そして二月の中旬下旬になると、よく晴れた日の、近くの公園に遊ぶ親子連れの甲高い喜びの声が飛び交い、とてもにぎやかです。そんな情景に出会い、

私も微笑ましく心底から嬉しい気持になります。
朝から良く晴れた日も午後になると、きらきらした日差に、紗の織物が、空全体を覆って来るような光景になる日が多いように思います。
薄い絹を通した中空は、毎年、気怠くて、少しばかり物憂い気持の二ヶ月余りです。

春宵の片手痛めて知る総身　　石　動

仲春のころ、妻と八ヶ岳山麓のリゾート宿へ行った。
「星空好き」の連中の「合宿」。「ほしつむぎの村」「星の語り部」などと称している。その夜、光を消そうという「甲府ライトダウン」などの活動もしている。（ご興味ある方は、ネットのサイトやＹＯＵＴＵＢＥでご覧ください。）
集まれる連中２０名くらいが集結、来る一年の活動を話し合う……という名目。中味は、真面目な、体のいい酒のみ会。種々雑多な連中が集まるので、話種が豊富、持ち寄った酒種も豊富。
「会議」果て、暗い敷地内を歩いて、己の建物に戻るに、段差を踏み外し、左足首を痛める。翌日の活動を、どうやら騙し騙し終え、家に戻る。
そして、今、松葉杖生活。ギブスが外れるのが２週間後。やっと宿の取れた「諏訪おん柱祭」には、間に合ってほしい。と願っている。
掲句は、確か「四十肩」的症状の頃。そして今は「足首」。今ならさしづめ「片足痛め知る総身」。春先は私の鬼門かも。
そして　つくづく思います。身体が健全であることの「しあわせ」を。しあわせ……とは、ほんのささやかな事に潜んでいる。石動老師　訓話でした。

きらきらと初蝶舞ふや洗車中　幸　江

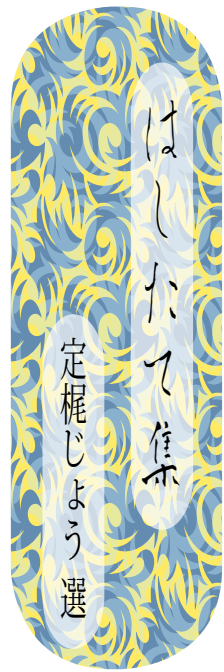
初蝶がホースの先から出る水にまるで話しかけるようだった。洗車をする日は朝から良く晴れ、気分が良い心地。まず水道の蛇口を全開!!ホースの出口に近い所を指でキツク絞る。その時一気に水玉となった水は車の屋根に降りかかる。蝶は生まれたばかり、きっと力を出し、羽を広げて人間界に来たんだろう。とにかく水が飲みたい、陽がずいぶんと熱い。キラキラ水が降っている。急いで飛んできた蝶、気が付けば水玉が話しをしている。ねえ見て御覧小さな蝶が僕達と遊んでいるよ、君はどこから来たの、そして何処に行くの。やがて洗車が終り水玉も何処かに消えた。

亀は鳴くと告げて歸りしちちとはは　喜　孝

わたしは自慢ではないが落とし物の名人である。毛糸で編んで貰った手袋はよくなくした。左右の手袋に毛糸の紐をつけて離れないやうにもしてくれたが、そこは名人、だうしてなくすか名人すら解らない早技である。自転車の荷台にゴム紐で括ったので安心して戻るとあら不思議なくなってゐる。慌てて元来た道をふはふはと戻ったこともあった。

ところが不思議になくならずわたしの身辺にいつもゐてくれるものがある。その一つは熊の木彫の置物。置物といっても手のひらのちょこんと乗る体長六センチ程の可愛い熊である。腹には小さい紙に「JAPAN」とプリントされてゐたものが貼ってあったが流石になくなってゐる。

（35ページへ）



佐藤恭子

さあさくら冬の閂くぐりぬけ
熱燗や六臆騒めく春の宵
水底であそぶ春日の七つ色
竹林やかげもかたちも無き鶯
狼狽やネコ目イヌ科字画十

さあさくら冬の閂くぐりぬけ

「冬の閂」に工夫。

竹林やかげもかたちも無き鶯

「かげもかたちもない」は慣用句。短歌、俳句にその形のまま遣うことは避けたい、というのが約束。

竹林やかげかたちなくて鶯

狼狽やネコ目イヌ科字画十

分類学に正直に、というわけではありませんが、「ネコ目」の辞に違和感。そう説明する辞書もありますが、今はつかわない。「字画十」で充分句は完結しています。「狼」も「狽」もなるほど十画。

食肉目イヌ科狼狽字画十

森　直子

朝日影畳に移り雛の間

吊し雛触れて揺らして女の児
マニキュアの指に抓みて硝子雛
畦踏んで蝌蚪の田どつとさざめかす

朝日影畳に移り雛の間

よく見ています。ただ、「畳」とありますので結句「間」はあってもいいが、なくても、と。

朝日影畳に移り雛かな

マニキュアの指に抓みて硝子雛

「マニキュアの指」をみつけたのが手柄。硝子の雛があるんですね。

畦踏んで蝌蚪の田どつとさざめかす

「蝌蚪の田」か「田の蝌蚪」か、考えてみてください。

秋川　泉

パリに居て桜描くという便り
日食やコペルニクスも春惜しむ
赤レンガ倉庫も海も春霞
春夕べクルージングの波の跡

日食やコペルニクスも春惜しむ

面白い、面白い。

春夕べクルージングの波の跡

中七以下が平凡。航海する船に跡ができるのは理の当然ですから。

水尾しるきクルージングの春夕べ

山荘慶子

川面に散る残り鴨の鋭声かな
桃園や花の精のけはいありて
草萌えをゆく少年や車椅子
兎にも争いありて春の雲

川面に散る残り鴨の鋭声かな

「川面に散る」とあります。ということは一羽や二羽ではない。「残り鴨」とあればそんなに沢山いない筈。ここは「春の鴨」と改めたい。残る鴨に限らずこれから帰るべき鴨も含まれるのが「春の鴨」。そしてリズムも整えたい。

川の面に春の鴨散る鋭声かな

因みに「鋭声」という単語。五〇万語収録の『日

本国語大辞典』に「語義未詳。〈鋭声〉か」とある以外、未詳扱いか未収録が多い。現代の句歌には普通に遣われているのですが。

葭切のをちの鋭声や朝ぐもり　秋桜子

桃園や花の精のけはいありて

中七が六音、坐五が六音、全体で十七文字。私の好みでは好しとしたいのですけれど、俳句一般としては多分通じない。慶子さんが、破調を狙ったんだ、ということなら大いに結構ですが、そうでないなら

桃園やけはいは花の精なりし

兎にも争ひありて春の雲

おとなしやかな筈の兎も争いをするという。しかし「ありて」が緩いと思いますし、「兎」を少しばかり強調して「兎さへ」。天にはのんびりと雲。

兎さへ争ひをする春の雲

七郎衛門吉保

落ちてなほ芝に紅点す梅の花
野兎のあと途切れをり斑雪
春霞大観の画のごと変りゆく
地廻りの猫避けるほど落椿

落ちてなほ芝に紅点す梅の花

「なほ」を外して

芝に紅点じて落ちし梅の花

春霞大観の画のごと変りゆく

リズムを整えて

春霞大観の画のごとくなり

地廻りの猫避けるほど落椿

こういう場で「地廻り」の語を遣うこと、私には思いもよらなかった。なるほど、と思う。

なお、三月号掲載の吉保さんの句、

冬の蜂刺すこともなく浮止り

私は、「浮止り」がよく分らなくて「ホバリングのこと？」と吉保さんに問うたのですが、「坐五をホバリングで宜しいのか」、と。

少し調べてみましたら、「ホバリング」に日本語として定着したことばがないようなのです。せいぜい、「空中停止」か「停止飛行」か。明治・大正の世ならきっと適した訳語が出来した

語として定着したことばがないようなのです。せいぜい、「空中停止」か「停止飛行」か。明治・大正の世ならきっと適した訳語が出来したでしょうが現代はそのまま原語を遣うことが多いわけで、懸命に考えて「浮止り」の語を案出した吉保さんには敬意を表します。ですから「ホバリング」は厭だとお考えなら「浮止り」で宜しいのでは。

田中藤穂

城跡や梅林の花まだ三分
資料館まで春泥の道をゆく
白塗りの奪衣婆の待つ春の寺
陽炎や航空兵の姿なく

資料館まで春泥の道をゆく

坐五は「道つづく」とした方が。

白塗りの奪衣婆の待つ春の寺

「白塗りの奪衣婆」とはまたすさまじい言葉。そしてその凄絶さを癒すように「春の寺」を柔らかく置いた。うまい。

これは好みに類しますが、句中助詞「の」が続きます。〈白塗りの奪衣婆が待つ〉としたい。も一度言いますが、私の好みでは、です。

付け加えます。三月号藤穂さんの句に

武州古社石のうきぎに雨寒し

があって、私は、どこかで見たはず、と書いたのでした。おハガキによるど、浦和市にある調（ツキノミヤ）神社には狛犬ではなく石の兎がかわりに、あるいは置物として沢山あるそうで、それでも記憶のよみがえることないのですが、浦和には同郷の方がいらしてなんどか訪ねたことがあります。そんな折か、と。神杜寺院そのものは記憶にとどめることないのですが、鰐口が新しかった、とか賽銭を入れ損のうて失った、とかはふしぎに記憶しているのです。

森　理和

白髪を染めてみようか春まぶし
豆腐店小母さん急逝落椿
庭先に花茎を伸ばすフリージア
珈排の深き苦味を春の午後

春の風思ひも寄らぬ来訪者

白髪を染めてみようか春まぶし

春光がまぶしかった、ということもあるでしょうが髪を染めようと思った時すでに眩しく感じた、と。自愛の心を持つことも大切。

庭先に花茎を伸ばすフリージア

このままでは散文の語順です。

庭先や花茎を伸ばすフリージア

春の風思ひも寄らぬ来訪者

上五「春の風」、ではインパクトがなさすぎる、とおもいます。「春の風邪」ではどうでしょう。

長崎桂子

よろづ家事身体ほぐ机る雨水かな
買物を背負ひぶら下げ暖かし
暖かや南東の方雨戸開放す
明け方の囀りは吾を励ます

買物を背負ひぶら下げ暖かし

助詞「を」などは、外せるものなら外した方が簡潔。あるいは「ぶら下げ」も音が強くて「暖かし」を邪魔している。

買ひし物背負ひ手に下げ暖かし

暖かや南東の方雨戸開放す

「明放す」と言いたい気持、分ります。ですが定型化するために

暖かや南東の方雨戸繰り

としても然程遜色ないのでは。

明け方の囀は吾を励ます

慶子さんの時にも言いましたけれど、中七以下が破調になっている。狙ったものなら宜しいのですが、そうでないなら

明け方の囀に励まされをり

黒澤佳子

靴結ぶ験担ぎする受験の子
大根抜く土に湿りや青首まで
渡稜草時間差茄や根に切目
一人静花の名知るや紀伊の宿

大根抜く土に湿りや青首まで

秀句です。「大根抜く土に湿り」とありやや平凡か、と読みつぐとその湿りが「青首まで」と続いて、驚くのです。

須賀敏子

気前よく乙女椿の咲きにけり
鮮やかな陽光桜に祈りあり
夜桜や提灯にある祝結婚
金釘で綴る日記よ三月尽

鮮やかな陽光桜に祈りあり

「桜」は「花」でよろしいのでは。
鮮やかな陽光花に祈りあり
「祈りあり」が面白い。

夜桜や提灯にある祝結婚

中七「提灯にある」は、具体的に言った方が宜しいのです。
夜桜や提灯の文字祝結婚

金釘で綴る日記よ三月尽

春終らんとする日の日記。つくづくとつたない字、と思う。でも敏子さんの文字は下手ではない。ご自分のことではない？

大日向幸江

ほらポパイそしてダンボも春の雲
辛夷咲き鳩の身体の痩せゆきて
二輪草低き垣根をくぐり抜け
巡り行く小江戸川越花の雨

巡り行く小江戸川越花の雨

「巡りけり」として上五で休止を入れたい。

赤座典子

月天心高層の玻璃冴返る
花辛夷主無き家に開き切る
木々目覚め赤城の山の笑ひ初む
せせらぎに逆ってゐる蝌蚪の紐

花辛夷主無き家に開き切る

ちょつとしたことなんですけど、「主無き庭」とした方が。

せせらぎに逆ってゐる蝌蚪の紐

「せせらぎ」は流れのあること。蛙はそんな処には卵を産まない。おたまじゃくしは泳ぎが得手ではありませんので流されてしまいます。

さざなみに逆ってゐる蝌蚪の紐

「逆ってゐる」が秀逸。

中川句寿夫

木の根明く巡査に道を問はれけり
柳芽吹きて定年に適ふ町
応分の寄付に前例雀の子
駅裏は銭湯の町養花天
烏の子鳴いて醗素の足らざる日

木の根明く巡査に道を問はれけり

季語「木の根明く」が一般的ではないかもしれません。雪国だけに使われる語彙なのです。二月後半くらいから木の幹の根っこの辺りの雪が溶けて、根元が見えるようになります。そんな状態をいうことば。そしてある日巡査に逆に道を問われた、という。駐在さんはその地の生まれでないことが殆んどなのです。

柳芽吹きて定年に適ふ町

定年後に住むに適した町。芽吹いた柳の枝が風にゆれているのかもしれません。

駅裏は銭湯の町養花天

「銭湯の町」といってもそれが沢山ある、ということではないでしょう。いささかさぶれた駅裏の町であり、銭湯だけが盛っている、そんな町。花ぐもりの天気がっづくのです。

佐藤喜孝

蟬の穴だうも春まで持ちさうに
うぐひすやゆゑに障子を一枚分
春の鳥ひがな一日揺るる籠
牛蛙近寄る心算だったのに
おしまひに花をあふげり缶ビール

うぐひすやゆゑに障子を一枚分

鶯の声がした、だから障子を一枚分あけた。そのことを言わんと「うぐひすや」と切り、「ゆゑに」と続けた。このモメント、見事という他ない。

牛蛙近寄る心算だったのに

この蛙は図体が大きい。だから鈍なのだが、近寄る前に行ってしまった。その分だけ心が残るのだ。

おしまひに花をあふげり缶ビール

確かに缶ビールのさいごはみんな仰のけになります。飲み干すのです。それが花を仰ぐことにもなる。そして、花より団子。

（26ページより）

小学六年の夏休に六歳上の姉に連れられて父の郷里、秋田の大館へ遊びに行った。途次、蒸気機関車の黒煙で窓の開け閉てが忙しかったのが印象に残ってゐる。その折、従兄弟たちと十和田湖へ遊びに行った。お土産屋さんで従兄弟のお兄さんが買ってくれたのがこの熊で月の輪熊がモデルらしく、北海道の羆と違ひなんともかはゆい。学校へ持って行って友達に自慢したものだ。その後何度も引っ越しをしたが不思議と蹤いてきてくれた。数年間行方知れずのこともあったが、いまは仏壇を定位置にしてゐる。

亀の鳴く句は、この文章を書いた後に旧作の中から選んだ。

春の日に

斉藤裕子

差し引いても幸せ勝る菫草

猫撫でて我身慰む日永かな

猫撫でて窓いっぱいの春日かな

みやあごみゃごあんあんと恋の猫

春の日に挑むノクターン余命あり

命続けと挑むノクターン春の日に

咳激し肋堪へかねベキと泣く

穏やかな時今少し欲し桜前線

予約する緩和病棟初桜

真心が届く手編みよ春の色

咳き込めば猫駆けよりて我を見つむ

四月十日　メールにて

緩和病棟入院・花の路

斉藤裕子

入院の車で見上ぐ花の路

病棟より街を望めば花の河

車椅子で繰り出す花見にこやかに

車椅子進む先々菫草

花見の場病棟に変へ友来たり

緩和病棟夫と静かな花のとき

緩和病棟花観てくると子の涙

口結び息子の涙花の日に

薬量の増えるは哀し花の朝

病棟にピアノの調べ花の雨

傘まわしをさなご通ふ花の路

とりどりの傘が行き交ふ花の路

傘たたむ仕草も楽し花学舎

背で聞く看護士の声花の窓

看護士の至れり尽くせり花の風呂

窓見上げ夫が手を振る花の許

散る桜ほら緑の葉出ているわ

使ひきつてゆきたい命花吹雪

花吹雪泣いてる暇はありませぬ

花吹雪悔しいなんて言はないわ

かひがひしき夫の鼾は子守歌

楽しむことで返せばいいと子の助言

四月二十二日　メールにて

あとがき

「あを」では大分前に竹内弘子さんと堀内一郎さんに選句欄をお願いした。少し間が開いてこの度、定梶じょうさんにお願ひした。間が開いた分、投句なされる方も戸惑はれるかと心配しましたが杞憂でした。「はしたて集」は活気のあるコーナーになり大喜びしてゐる。文法は勿論、句作の際の押すところ引くところの難しいところを実作に即してのお話、特に選者に賞められるとうれしいものだといふ事を忘れてゐました。

欄題の「はしたて」ですが、能登の枕詞がよいと閃いた。早速ネットで「能登・枕詞」と入力、ポチッと押すと「はしたて」とご託宣があった。縁ある言葉とおもひ決めた。「はしたて」の詳細は今号の「はしたて集」をお読み下さい。

題詠シリーズは順調？にすすみ今三月末締切りで「草」を募集してゐます。まだ間があるので頭の体操にと作ってみて下さい。

次回は「糸」です。

作りやすい漢字をと熟考の末の「糸」です。ご参加おまちしてます。締切五月末。

〈喜孝〉

二〇一六年五月号

発行日　五月三日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／松村美智子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。